

流離譚 第四回

流離譚の第四回は正月に行われる郷土には重要な行事、馭初（のりぞめ）式関連の記載が多い。その一つを次に引用します。

・・。文助は、天保六年の馭初に出馬したあと、天保七、八、九、十と四年間はとういふ事情によるものか、出馬していない。」

毎年、出馬するように考えていたようであるが、山北地区の深尾の預り郷土が、順番に出馬したと思います。地域にどの程度の対象者いたのか、文助日記に

次の記載があります。

弘化四丁未年三月本町御屋鋪内膳様御養子二御出被
為遊候二付御国内御巡見・・・(四月)廿五日山北恒之
進方御宿 同廿六日御滞座被為遊馬術御覧被仰付：
首尾能相勤一同御扇子拝領 乗馬人数自馬持

大石良衛門 岩井直蔵 公文勘十郎 池内平次郎 岩井
専次郎 山本安次郎 別役俊蔵 西又二郎 同隆左衛門
貞岡栄次郎 安岡利弥 安岡文助 安岡恒之進

右に自馬持が十三人（本家の覺之助など記載され
ていない人（家）もあるのだろう）居ます。これらの

家から順に地域を代表して馭初に出るのでしよう。

文助は馭初に天保六年に出馬、兄の源右衛門の天保十三年より先に出ています。父廣助は馬屋を文政十三年に建てていますのでその頃に馭初に出出馬したでしょう。兄が出た天保十三年は、父廣助が死去し家督相続した年です。家督の所有者しか出られない決まりがあつたと推測します。地域代表、家督条件から一生に一回しかは出馬できないと思います。

文助は毎年の馭初の状況を日記に記載しています。地域代表の出馬者から結果を聞き日記に記入してい

たのか、見に行っていたのか。流離譚では日記の結果記入から文助が毎回出馬したように記述しています。出馬の準備に関して流離譚に次の記載があります。

- ・ 自分一人で馬に乗つてやつてくればすむのでなく、鎧櫃だの何だの大きな荷物を持つて出てこなければならぬのだから、その手間だけでも大変だ。

「江戸幕府役職集成」には二百石取りの武士は、主人に侍、兜鎧持、槍持、馬の口取、小荷駄の計五人に馬を引かせて戦に馳せ参じるようになっていきます。

馭初の参加条件は不明ですが、家の規模に応じ対応

していたのだろう。いずれにしても甲鎧が入った鎧櫃（展示は空）を担ぐ、あるいは着て乗馬して物部川は渡って出掛けたのだろう。

流離譚に恒之進の馭初に関して、文助日記から引用しながら次のように記載しています。

・その年の四月に黒鹿毛四歳馬を代金弍朱卅四斤で買い求め、次の弘化四年の正月十一日には、当年十三歳（届け出は十六歳）の甥、恒之進をつれて馭初に出馬し、自分も初出馬の恒之進も、ともども首尾能く相勤め、黒鹿毛の馬はまことに上馬であると悦

んでいる。

父、祖父も馭初に参加しているので、家に鎧甲はあったでしょうが、十三歳の恒之進少年には大きさが合わないので購入したのでしょうか。安政三年二十一歳の時恒之進は、江戸に藩の指示で研修に行き、鎧櫃を購入して戻っています。恒之進は鎧甲をその時に購入したとの記録はないですが、自分の体に合わせたのを購入して戻った可能性はあります。

流離譚第一回到土佐駒に次の記述があります。

・ 元来、土佐駒は長一寸（四尺一寸のこと）に満た

ず、至って小形のもののみなるに、此度の拝領馬は長五寸（四尺五寸のこと）の大駒なれば、人々ひと目みて興を醒すも理りなり・・・寺石正路「南国遺事」

土佐駒と大駒と四寸（十二センチ）の差があります。展示の和鞍で乗馬している馬は大駒です。水が深いと燈（あぶみ）は水に浸かるでしょう。

馭初の話題の多い第四回の前半に次の記載があります。

藩主への年賀謁見について前にも述べたが、この

ときには、紙衣と称して仙花紙に渋を塗つたやうなもの、藩主はじめ上士一同、素肌に着用した。

紙衣が家に残っていました（展示）。誰が、上士として列席したのだろうか。参勤に参加しているので恒之進と思われる。恒之進は上士レベルとなり、嘉永二年に番屋の北側に長屋を建て「江戸幕府役職集成」に書かれた武士として必須の五人の使用人を住ませ、十二年後の文久元年に現在雪隠と呼ばれる建物を建て、焰硝製造を計画していたと推測、その計画を実行する前に恒之進は病死しました。



鎧甲を着た 叔父

昭和 26 年撮影

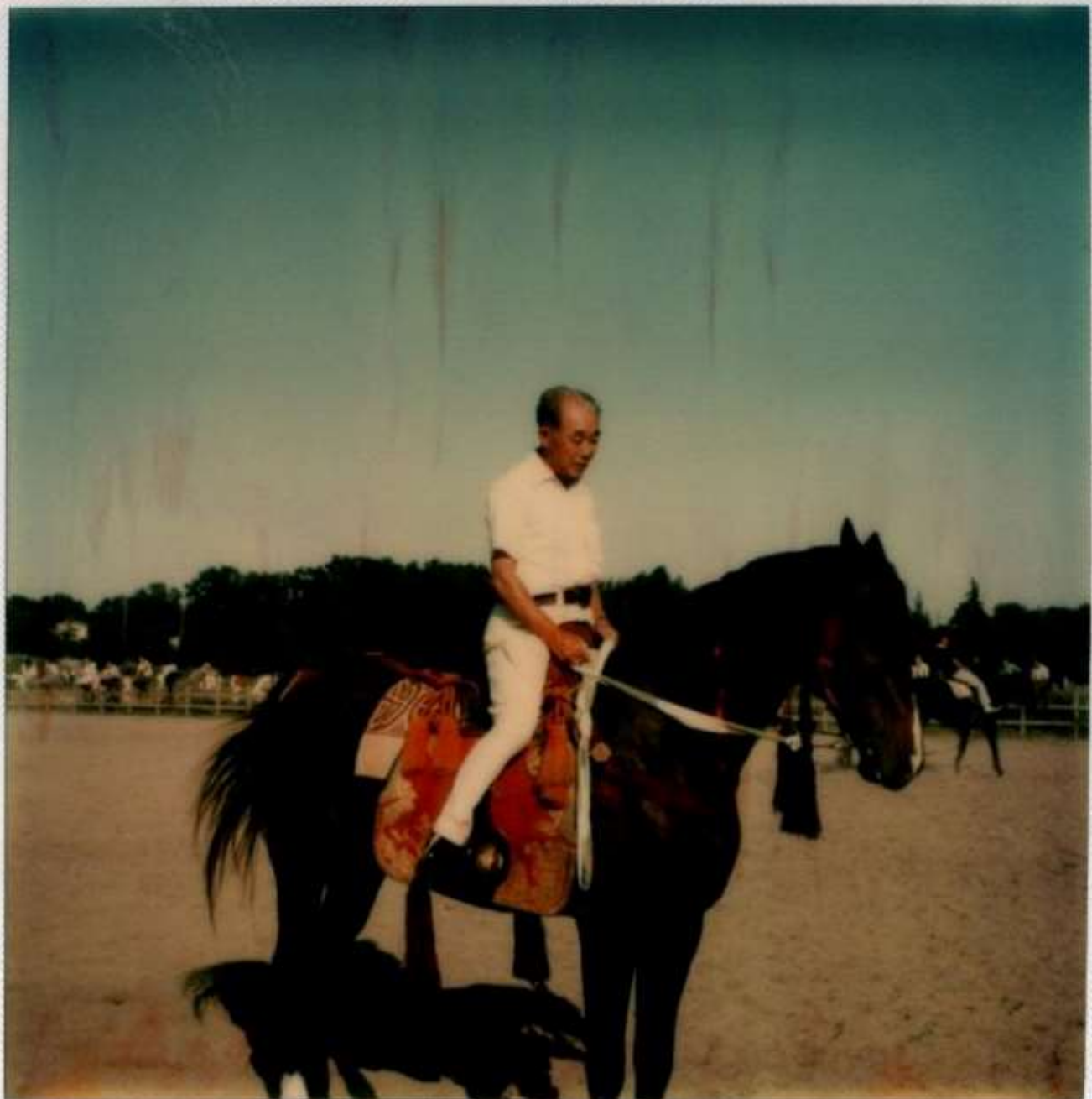


和鞍
鐙

手綱

昭和 50 年頃撮影

(鐙 ガラス内展示)



和鞍の馬に乗る

昭和 50 年頃撮影

* 馬は土佐馬ではありません。